

1. 教育の責任

「学修活動を通じて、創造的な構想力と表現力を修得し、文化的に人間生活を考える素養を備えた感性豊かな人材を養成する」とした建築&学部の教育目標をふまえて、技法を学び自己の表現を自ら問うことにより、作品制作を通じて社会人基礎力の能力の向上に努める。

「デザイン造形美術入門Ⅰ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、春学期、2単位、102名）

「デザイン造形美術入門Ⅱ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、秋学期、2単位、109名）

「染色工芸技法Ⅰ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、春学期、2単位、11名）

「染色工芸技法Ⅱ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、秋学期、2単位、8名）

「ゼミナールⅠ」（演習、デザイン・造形美術メジャー必修科目、春学期、2単位、4名）

「ゼミナールⅡ」（演習、デザイン・造形美術メジャー必修科目、秋学期、2単位、4名）

「卒業制作（染色工芸）」（演習、デザイン・造形美術メジャー必修科目、通年、4単位、3名）

2. 教育の理念

染色工芸では長い歴史の中で培われた伝統技術の理解と継承、そして、自ら新しい価値観や芸術を確立することを目指す。さまざまな困難や問題点に向き合い、解決していくことで、これからの人生における重要な能力の一つである問題解決能力を身に付け、よりよい人生を歩む姿勢を制作を通して導くことが教育の理念である。それは、「豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材を育成する」という本学の教育目的と通ずるものである。

3. 教育の方法

（1）授業実践の工夫

「デザイン造形美術入門Ⅰ、Ⅱ」では染色工芸の魅力を学生に伝えるように課題を工夫しつつ、実践を通して、表現することについて追及する姿勢を導くような具体的なカリキュラムをつくるように努力している。

「染色工芸技法Ⅰ・Ⅱ」は300番科目としてすでに染色の基礎を修得済みの履修者が対象である。糊型染による浴衣の制作とろうけつ染めの大型作品の制作を課題とし、技法の指導と表現の向上を中心に全体指導と個人指導を織り交ぜ行っている。

「ゼミナールⅠ、Ⅱ」では染色工芸の作品研究、技法研究を行い、社会連携で丹後ちりめんの活性化プロジェクトとして、学生の視点で問題点を考え、商品開発や染色実験を行っている。

「卒業制作」では、これまで学んだ技法や経験から自分らしい表現で、自由な作品制作を実践する。それは、自由である反面、自己責任も伴い、難題を解決しなければ前に進めないことが多々ある中、制作をとおして、染色を、芸術を、社会を、自分を考え抜いていくプロセスとなる。

（2）総合的な学修成果達成のための工夫

全ての授業で課題ごとに合評会を行っている。合評を通じて表現の多様性、他者の理解、柔軟な発想について学生が確認するように努めている。

社会連携事業で丹後ちりめんの活性化プロジェクトとして、学生の視点で問題点を考え、商品開発や染色実験を行っている。社会における染色工芸の意味や、繊維産業の現状を学び、自らの進路について思考する。

4. 教育の成果

（1）授業見学・授業アンケート等の内部評価

概ね高評価である。非常勤の先生方とチームとなり、学生一人一人の個性を大切にしながら、染色工芸の技法を習得でき

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：建築&芸術学部 名前：今福 章代 作成日：2024年11月20日

るように工夫して指導していることは評価につながっていると考えます。学生たちの学びを一番に考え、制作環境の充実を図りたい。

(2) 学会・研究会、高大連携、産学連携等における外部評価

京丹後市との社会連携では、「古代の紫再現実験 in 京丹後市」、「わくわく子ども大学染色教室」を実施し、古代の紫染色再現実験を子どもたちとワークショップを行った。

長期入院の中高生の子どもたち対象に、ゼミナールの学生たちが看護師の白衣の生地を天然染料で染色し、子どもたちがその生地にペインティングをして、多目的生地を制作した。また、ホスピタルアートfromギャラリーで学生の染めた生地と子どもたちの作品を使って展示をした。大変良い作品ができ、好評であった。

5. 改善への努力と今後の目標

染色工芸は技法習得が難しく、スマートフォンやパソコンなど、デジタル分野が生活の一部として成長してきた学生たちに対して、工芸や手仕事の魅力を伝え、日本の染織の伝統を守り伝えることの難しさを感じ、目の前の学生たちに対応しながら、日々改善を繰り返している。

インターネットがいくら発達しても、face to faceで対話することの大切さと同じく、自らの意思で身体をコントロールし、創造することは、これからの芸術では重要なファクターである。長い歴史の中で培われた先人たちの技術や工夫を学び、自分自身の表現を探究する姿勢は、大きな時代の流れの中で自分の立ち位置を確認し、強靱な自己を培う糧となる。また、このことは、多様な他者を理解共存する基礎力を育むことに繋がり、芸術の世界のみならず、社会に自由に羽ばたける人材を育成したい。

【添付資料】

OTEMAE SENSYOKU 将来を期待される新鋭染色作家展 染—営みと探究—
(卒業生作品展報告書 PDF資料 授業教材)

OTEMAE SENSYOKU

将来を期待される 新鋭染色作家展
染—営みと探究—



大手前大学の染色工芸は、美学美術史学科のひとつとして、1981年に開設し、1982年に三浦景生先生が教授に就任された。それ以来、来野月乙先生、中野光雄先生と京都市立芸術大学の名誉教授の先生が歴任されてきた伝統あるコースである。

「染織工芸」ではなく「染色工芸」と表記しており、「織」の工程はともなわず、「染」に特化したカリキュラムであることも特色である。日本の美術系大学の多くが染織科からテキスタイルデザイン科など、より広範囲の染色表現に対応したカリキュラムや名称に変更し、幅広く学べる方向に転換している。しかし本学では、来野月乙先生の打ち立てられた方針に従い、日本の染に於ける一番重要な二つの技法、型染とろうけつ染技法の取得に集中し、「染め」の基本をしっかり学べることを重視している。現在は、今福が京都市立芸術大学で各先生から学んだカリキュラムに多少の変化を加えながら継承している。

さまざまな学習内容の中でも特に型染による浴衣制作実習は、来野先生が最も重要と考えておられた科目である。そのため実技棟増築の際には、12mの反物10反を同時に引き染できる設備を特別に整えていただいた。型染による浴衣制作授業は、染色工芸の専攻以外の学生たちの関心も集めており、意欲的に参加する者も多い。毎年、

20名以上の学生が浴衣の反物を一斉に染色する教室の情景は圧巻である。

この科目ではデザインのスケッチから始めて、型彫、糊置き、染色、定着などのすべての工程を学生自身が行うものであり、難易度は高い。こうした過程を乗り越えることで学生たちは、染色への理解や特別な愛着を深めることができる。

染色工芸に進む学生はもちろん、デザインや絵画、立体造形、映像・アニメーションや漫画、他にも他学部の学生など、いろいろな学生が浴衣制作を体験することで、自分の分野での表現の幅を広げていることであろう。

今回、新鋭染色作家展の監修を今福がさせていただくに当たり、異例ではあるが、全て大手前大学の卒業生を選出することとした。自分が大学で深く関わった作家たちを選ぶにあたり、副題は「染—営みと探求—」とし、作家のこれまでの人生のストーリーにまで踏み込み、作品を理解し、その上で作家の選出をさせていただいた。従来の、時世代を担う新鋭染色作家展のコンセプトとは異なる選出形式となり、キュレーターの深萱氏には多大なご心配をおかけしたことをおわび申し上げたい。



生きることと染めること

染・清流館キュレーター

深萱 真穂

現代の染色作品を展示する京都・室町の染・清流館は2018年11月、大手前大学教授のいまふくふみよさんにご監修いただいた「将来を期待される新鋭染色作家展 染 一営みと探求」を開催した。

「将来を期待される新鋭染色作家展」は、2006年に開館した染・清流館で08年から毎年11月前後に開いており、18年で11回目だった。毎回、キャリアのある染色作家に監修をお願いし、若手の出品作家を選んで展覧会を構成していただく。いまふくさんに委嘱した前任者から引き継ぎを受け、わたしが清流館側で展覧会を担当した。

例年、出品作家は複数の大学の卒業生から選ばれ、おのずから多様な作風が会場を彩る。出身校の枠を越えた作家の交流や、緊張感を伴う切磋琢磨も期待できるかもしれない。しかし18年に関しては、出品作家の全員を大手前大学の卒業生としたい、と監修者から構想をうかがった。卒業制作展や学園祭のような内輪ノリに陥らないか、わたしは懸念を抱き、いまふくさんに念を押した記憶がある。

心配は杞憂だった。8名に出品いただいた展覧会は、作家それぞれの個性を反映して多彩な作品が並び、好評だった。たとえば3点組で幅7mを超える型染の大作タペストリーを出品した赤坂武敏さんは、染色工房勤務を経て18年に独立し、フランス作家とのコラボレーション作品も他展で発表するなど確かな技術を評価されている。小西康之さんは、児童福祉にかかわるなかで子どもたちの顔をろうけつ染で描き、彼らが手掛けた絞り染と組み合わせパネル作品に仕立てた。カナダでの活動歴のある三輪清香さんは鮮やかなろうけつ染で生命感あふれる大小の作品を出品した。チマチョゴリと着物を展示した金知潤さんは韓国から大手前大学に留学し、現在は母国でテキスタイルデザインの仕事に携わっている。展示室に並んだ作品の個性は、頭でひねり出したものではなく、個々の作家が歩んできた人生の反映であり、いまふくさんが掲げた展覧会の副題「営みと探求」のありようを雄弁に物語っていた。

さらに、福永崇晃さんや西坂彩花さん、高橋薫さんによる現代感覚あふれる着物や浴衣は愛好家からも注目されたし、西岡千尋さんが出品したタペストリーの円筒状のインスタレーションは鑑賞者が中に入って大いに楽しんだ。そうした卒業後間もない作家たちの作品にも、戦後京都の染色文化を支えた故三浦景生氏、故来野月乙氏、中野光雄氏からいまふくさんへと受け継がれた大手前大学における確実な技術指導が息づいていると感じた。染色業界を取り巻く環境はバブル経済の崩壊以後、今に至るまで厳しい。各大学では染色という語が専攻名から消えてテキスタイルやファッションへ移行する例が相次ぐ。大手前大学においても卒業生の進路など難しい課題に直面していると想像するが、いまふくさんに監修をお願いした18年の新鋭染色作家展は、生きることと染色が若手の作家において現在どう結び付いているかを示す、さらに年若い作家や学生たちへの、ひとつの道しるべの役割も果たしたのではないかと考えている。

将来を期待される 新鋭染色作家展

「染 一営みと探求」

いまふく ふみよ

今回の出品作家は職業として現在、染色の仕事にたずさわる方が2名、過去に染色の仕事にたずさわり、現在は他の仕事についている方が3名、テキスタイル関係の仕事をしている方が1名を含む8名で構成されている。

「生業」としての「染」、作品制作としての「染」と一人一人が様々な視点から、「染」という行為、もしくは表現と真摯な姿勢で「対峙」している。若い作家にとって、染色作品を制作できる環境を整えることは大変難しい。それでも「染」と向き合おうとする作家の姿勢と作品から、現代における「染」のもつ魅力と問題点について考えたい。

型染や縹染めをはじめとする伝統的な日本の染色技法は、長い歴史の中で多くの人々によって培われたものである。「型染の技法ももちろん学びたいのですが、その中に流れる、日本人の思考や哲学を学びたい」という言葉を海外の作家から聞いた時に、染色技法の中には、日本の風土や歴史、哲学や思考なども凝縮されているのだとあらためて認識した。

伝統的な技法を取得することは、大きな時の流れの中での自分のポジションを意識することであり、自分の中にしっかりと根を持つことに繋がる。確かな根を意識しながら、自分なりの表現で作品を展開していくことは、染色をきちんと学んだものだからこそ出来ることではないだろうか。

一人一人が、染の営みの中から、自分がやるべきことを探求し続けることが大切なのではないかと思う。そして、若い人たちのために、基本的な染色技法の学びを伝えるとともに、染の魅力を広めてゆく環境を整えることが最も必要とされていることを、今回の展示を通じて改めて強く思うに至った。



赤坂 武敏

2004年 大手前大学美術学科 工芸卒業

2004年 大手前大学卒業制作展 佳作

2006年 大手前大学専攻科 工芸修了

2011年 京展 入選

2012年 京展 入選

2013年 京都府美術工芸新鋭展 入選

2018年 型染工房 tint 設立

生命の樹

235cm×736cm

2018年制作



KIM JIYOUN

金知潤

1993年 ソウル生まれ

2015年 関西独立展

2016年 大手前大学メディア・芸術学部 染色工芸卒業

2016年 大手前大学卒業制作展 学長賞

現在 (株)SHINWOOTEXTILE PRINT (韓国)在職



水蓮 (チマチヨゴリ)

蓮華 (浴衣)

2016年制作



小西 康之

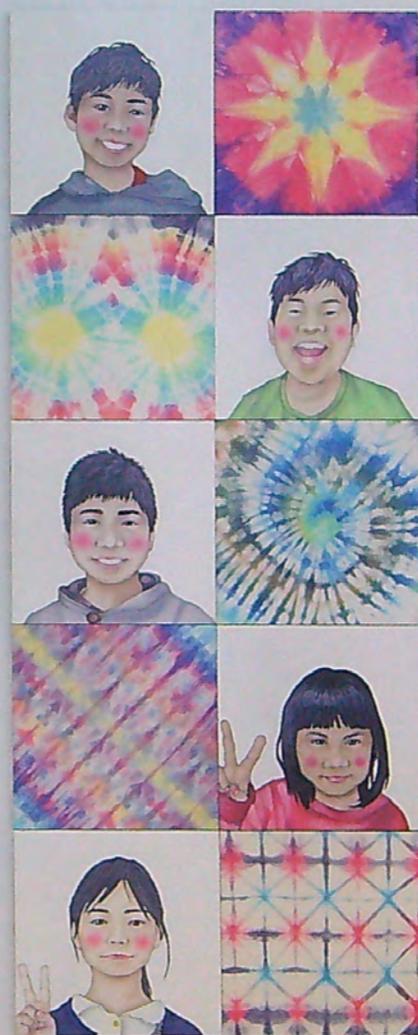
1981年 兵庫県生まれ

2004年 大手前大学美術学科 工芸卒業

2006年 大手前大学 専攻科修了

2006年 染色工房入社

2015年 児童福祉事業に従事



十人十色

166cm×266cm

2018年制作

TAKAHASHI Kaoru

高橋 薫

2018年 大手前大学 メディア・芸術学部 染色工芸卒業

2018年 大手前大学卒業制作展 理事長賞

2018年 第1回全国大学選抜染色作品展



みぐさ

2018年制作

NISIOKA Chiro

西岡千尋

2017年 大手前大学 メディア・芸術学部 染色工芸卒業

2017年 大手前大学卒業制作展 理事長賞



水槽の中の自由
210×200×200cm
2017年制作

NISISAKA Ayaka

西坂彩花

2017年 大手前大学メディア・芸術学部 染色工芸卒業

2017年 大手前大学卒業制作展 優秀賞



凧 - ナギー
2017年制作

福永崇晃

2015年 大手前大学 メディア・芸術学部 染色工芸卒業

2015年 株式会社 栗山工房 入社

2019年 日本新工芸展入選

2019年 新匠工芸会展入選



詰

2018年制作



波紋

波紋 II

2016年制作

三輪清香

1982年 鹿児島県生まれ

2004年 大手前大学 美術学科 工芸卒業

2004年 大手前大学卒業制作展 西宮市長賞

2006年 大手前大学専攻科 工芸修了

2006年 染色工房入社

2008年 京展(入賞)、西宮市展(教育委員会賞)

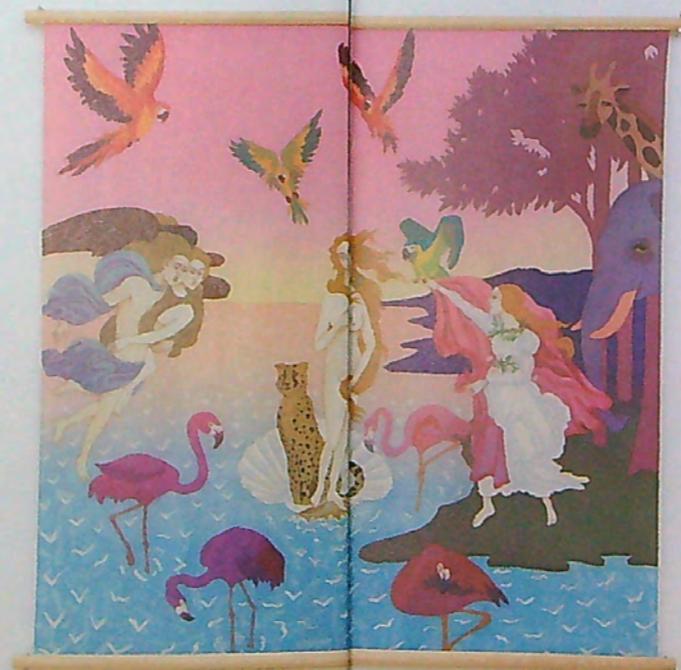
2010年 カナダにて活動(~13年)

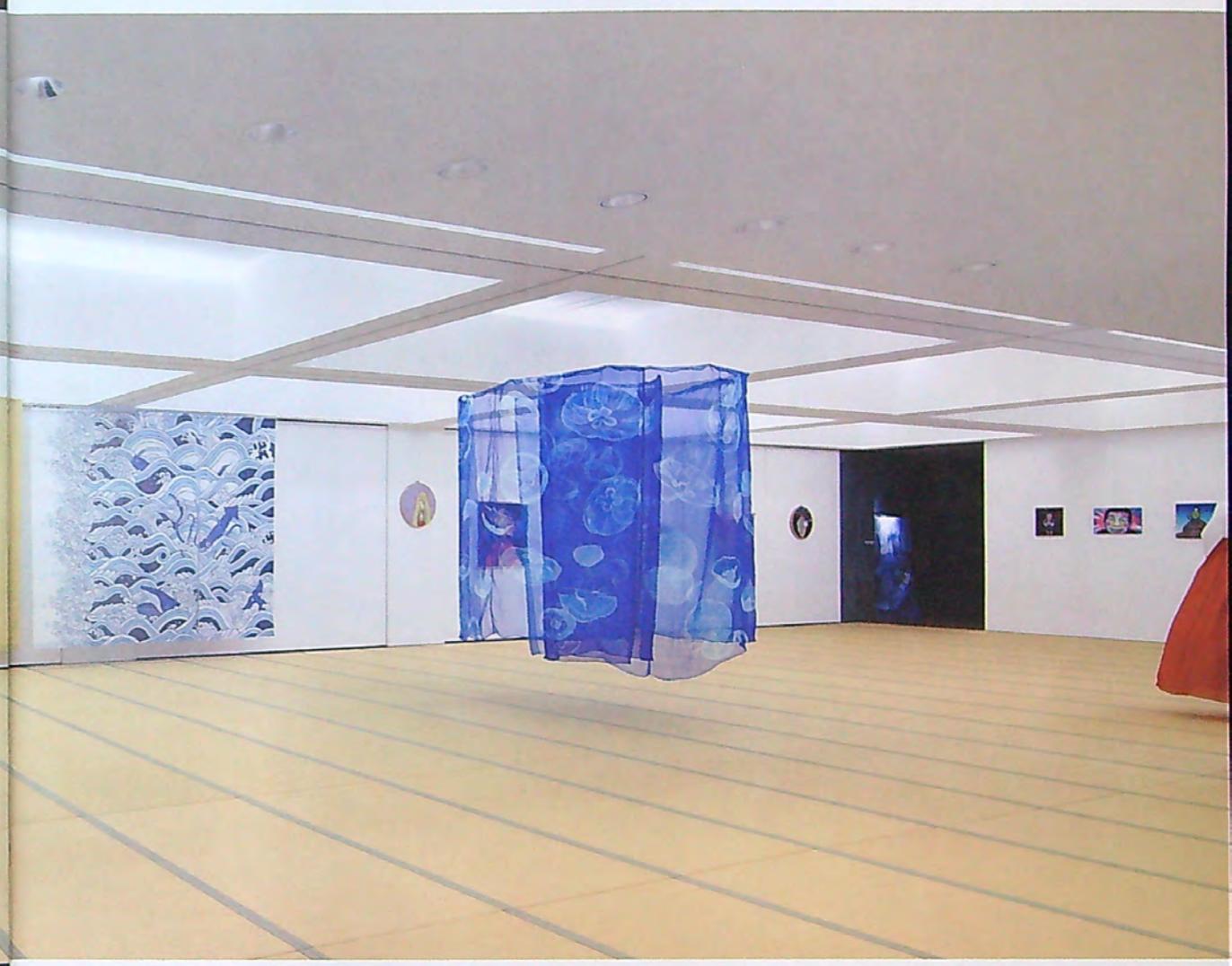
右 JOIN US → この指と〜まれ

中央 New FoOd Chain

左 Acuarium・ビーカー×♡

2018年制作





展覧会記録 OTEMAE SENSYOKU

将来を期待される 新鋭染色作家展 染—営みと探究—
2019年11月2日～25日

染・清流館
住所 京都市中京区室町通錦小路上ル山伏山町550-1 明倫ビル6階

発行 大手前大学

発行年 2020年2月

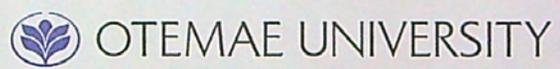
総括 いまふくふみよ

デザイン 白井雅彦

撮影 展覧会場及び作品 シュヴァーブ・トム

撮影 教室写真 廣本亮一

大手前大学
〒662-8552 兵庫県西宮市御茶家所町6-42
Phone 代表 0798-34-6331



OТЕМАЕ UNIVERSITY